

# 名古屋の古道・街道

池田 誠一

## 【7】名古屋のいろいろな古道

これまでの回で、東海道から岡崎街道までの官道、今日でいえば国・県道を紹介してきました。しかし街道にはこれ以外にも、人々によって歩かれてきたいくつもの道があります。

今回はそれらの道の全体を概観し、次回以降、順次紹介していきたいと思います。古道歩きは暑中1回休みとします。

### 1 「みち」とは

そもそも道とはなんでしょうか。分かりきったことかもしれませんが、休みを利用して一度整理しておきたいと思います。

道はもともと音としての「みち」でした。「道の文化」という本の中で山田宗睦さんはその「みち」の語源を説明しています。それによると、「み」はおみおつけのみと同じで事柄を美しく言うための音であり、「ち」が本来の意味で、あっち、こっちのちになります。この「ち」は漠然とある方向を指す言葉で、「みち」とはもとはある方向を面で示す言葉だと書かれています。

律令制の時代、全国を五畿七道に定めたとき、「うみつみち」を東海道と表したころに「道」ということばが出てきます。この道はやは

り始めは一定の地域を指す言葉でした。それが次第に都と国府を結ぶ道路を指すようになってきたようです。(図1)

\*

道が方向を示す言葉なら、昔の道の呼び方が

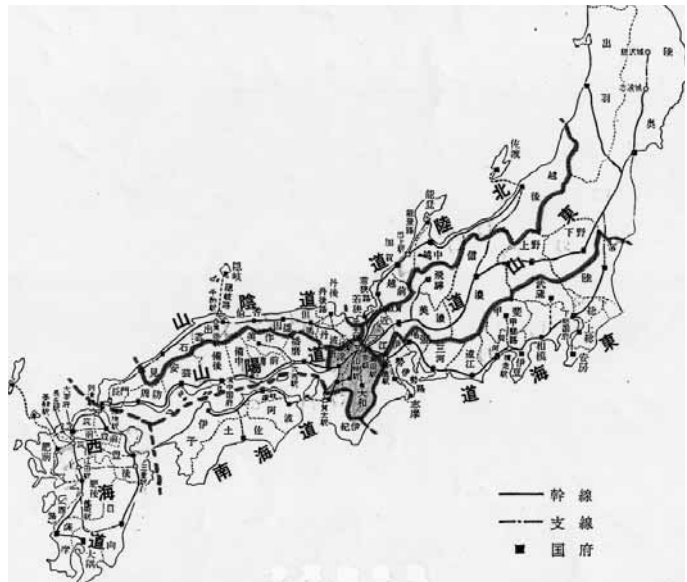


図1 七道の国と駅路図(文献②に追加)

よくわかります。例えばAとBとを結ぶ道は、今日ならば起終点のある「A・B道」ですが、昔はAからは「B道」、逆にBからは「A道」と目的地の方向を指すだけでした。A、B、Cと続く道は「B道」だったり、「C道」だったりもするのです。また、Bに向かう道は何本もの道が同じ「B道」ということもありました。

## 2 いろいろな道

それでは、道はどうしてできたのでしょうか。道は一般に何らかの目的でつくられ、あるいは人が歩きつづけることによってできます。もちろんその目的にはいろいろなものがあると思いますが、おおよそ次のように整理できそうです。

\*

まず考えられるのは地域を統治するための道でしょう。国を治め、地域を束ねるにはそこに交通路が必要でした。律令制度での国府を結ぶ道、鎌倉時代の京・鎌倉往還、江戸時代の五街道などは代表的な統治のための道です。また戦争に備えての道や城と奉行所・代官所等を結ぶ道なども統治のためといえます。

次に考えられるのは物の流通の道です。全国には塩の道と呼ばれる古い道があります。塩は人類の必需品であり、山の人々が海に行き塩を得るために道ができました。始めは海で塩を焼いて戻りましたが、そのうちに海の人と物を交換するようになり、交換経済が発生しました。さらに塩だけではなく産物の交換になり、次第に専門化して行くことによって流通の道ができました。その他にも漁村から城下へ、農村から城下へと、物の道にもいろいろな道ができました。

三つめは信仰の道です。人は神にすがり、仏を頼って各地を旅しました。熊野古道、

四国八十八ヶ所、西国三十三観音巡礼などは古くからあった代表的なものです。江戸時代には一般の庶民の間でも善光寺詣、お伊勢参りなどの寺社詣が盛んになり、物見(観光)の要素も加わって様々な道ができました。

このほかに、元の道の近道という形でできた道もあります。もともと他の理由で遠回りになっていたり、需要が少なかったのがだんだん増えてきて近道を作るなど、いろいろな短絡の道ができました。

## 3 名古屋の古道・街道

### (1) 主な目的から

以上のような道を名古屋で拾ってみたいと思います。名古屋の主な街道を記すと図のようになります。(図2) これらをその目的から見ると次のようになるのではないのでしょうか。

\*

#### ① 統治の道

名古屋には、幕府の管理した道として東海道、



図2 名古屋付近の主な街道



美濃路

美濃路、佐屋路があったことはこれまでに紹介した通りです。また藩としての道についても、木曾街道、岡崎街道を紹介しました。

この他には、城下から代官所に通じる道があり、市内では大曾根から東北の水野代官所に向かう水野街道があります。この道は今では瀬戸街道と呼ぶのが一般的で、途中までは瀬戸物の運搬ルートと重なり、信州飯田への道でもありました。また知多半島への道として鳴海から西へ常滑街道が伸びていました。さらに、税を運ぶ道もあり、山口街道はその一つとされます。

## ②流通の道

古くからの塩の道として有名なのは塩付街道です。南区の星崎付近から北へ。名古屋の東部を通過して東区古出来町辺りまでがはっきりしています。この道に交差する街道を通過して山間部から遠く信州まで星崎の塩が運ばれたのです。

その交差する街道の一つ高針街道は、塩のほか明治時代には亜炭を運ぶ道でもありました。

また岡崎街道も交差しましたが、この道は平針で伊那街道につなぎ、明治時代には飯田街道という名で定着しました。これらの道を通して山の幸も運ばれてきたのです。

市場への道では、枇杷島の青果市場に濃尾平野で取れた野菜を運ぶためにも利用された岩倉街道があります。また港区の百曲街道、千種区の焙烙街道も物の運ばれた道といえるでしょう。



稲生街道



高針街道

## ③信仰の道

寺社詣の道としては、まず善光寺街道があげられます。名古屋から信州に向かう経路で、中山道の大井宿の手前に合流する道です。善光寺参りの人が多かったのでしょうか、こう呼ばれました。古くからあった道といわれ、官道の木曾街道(本街道、上街道)のライバルとして下街道と呼ばれることも多い道です。

また、名古屋の町の四方にある観音(甚目寺、荒子、笠寺、竜泉寺)を巡礼する四観音道も一部が残っています。そのほかに、この地域には至る所から熱田に向かう宮参りの道があったようです。その中に名古屋城のないころの北からの道として、文献に稲生街道のことが記されています。

## ④短絡の道

近道はどちらかといえば短いものが多く、市内では、名古屋の城下と佐屋路を結ぶ柳街道とか、知多の常滑街道から東海道笠寺につなぐ知多街道が短絡の道といえるでしょう。

## (2)明治の道

明治になって道路は体系的に整備されるようになりました。明治9年には道路を、国道、県道、里道に分けました。その時定められたもののうち名古屋に関係する国道県道は、明治12年の一覧があり、表のようになっています。(表1)

ここで気が付くのは、道の名前が「○○街道」と街道という名前が使われていたことです。このため稲置街道(木曾街道)、津島街道(佐屋路)、

種類等級	名称	現市域の区間	
国	1等 東海道	有松～七里の渡し	
	2等 名古屋街道	熱田～名古屋鎮台	
道	3等 美濃街道	名古屋鎮台～枇杷島	
	篠屋街道	県庁～名古屋街道	
	岩倉街道	枇杷島～中小田井	
県道	1等 下夕街道	名古屋鎮台～勝川	
	百曲り街道	門前町～熱田新田(東海道)	
	2等	稲置街道	県庁～味碗
		瀬戸街道	大曾根～大森
		津島街道	古渡～万場
	3等	常滑街道	鳴海～大高
		拳母街道	平針～
		飯田街道	平針～
		新街道	平針～

表1 明治12年の市内の国道・県道(文献③)

飯田街道(岡崎街道)など、今日では元の名よりも明治時代の方が有名になった街道も多いのです。

\*

明治にできた道の中に、郡道があります。明治23年から大正12年まで、県と町・村との間に「郡」という自治体がありました。その郡が整備した道が郡道で、市内でも何十本という道があったのではないのでしょうか。いまでは名も消えてしまいましたが、ただ一つ市の東部を東海道と郡役所、飯田街道を結ぶ千種街道が、今日郡道と呼ばれて古道の仲間に入りつつあります。

## 4 「みち」でない道？

このシリーズの中で取り上げる道は、江戸時代には街道(海道)とか往還などと呼ばれた、「みち」の語源に近い道です。しかし道にはこの他にも、どこかに行く道ではなく、町の中で町を区画し、その活動を支える、「街路」という性格の道があります。

機能面から言うと、道は「道路」と「街路」という2つの種類に分けることができるともいえます。前者がある地点とある地点を結ぶ道であり、人や車の交通を支えるのが中心になるのに対し、後者は町の中を区画する道として、生

活や都市の活動を支えるものです。

街路も古代からありました。例えば、平城京とか平安京の都大路、中・近世では城下町の町割などは街路であり、今日都市計画でつくる道も基本的には街路です。

大正のころ、道に関する法律を作る時に、この道路と街路という2つの機能をどう扱うかでいろいろな議論があったようです。結果的には「道路法」ができて、「街路法」はできませんでした。その結果としてか、以後道は交通機能が重視されてきたようにも思えます。

最近、社会の成熟化が指摘される中で、道も交通機能ばかりではなくいろいろな機能の可能性が検討されています。日本でも、道路のオープンカフェでくつろいだりできると道のイメージが変わってくるのではないのでしょうか。

江戸時代にも、例えば名古屋の広小路は露店や縁台がでて人々の交流の場でした。(図3) 街道にも茶店が出て旅人を楽しませてくれました。

道は通りすぎるだけではさびしすぎます。私も、古道をさがしつつ近くにいい喫茶店などを見つけるとコーヒーの香りに浸るのが古道歩きの楽しみになっています。

かくれ道 土産にしたき セミしぐれ

〈参考文献〉

- ①山田宗睦他「道の文化」(1979、講談社)
- ②豊田・児玉編「体系日本史叢書交通史」(1970、山川出版)
- ③愛知県編「愛知県史」(1914、復刻1990、国書刊行会)
- ④菊地慎三「都市計画と道路行政」(1928、崇文堂)

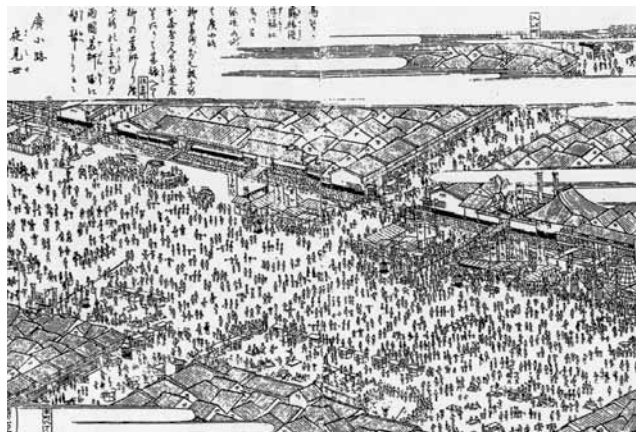


図3 江戸時代の広小路(尾張名所図絵)